

Jリーグクラブの普及事業に関する検討 —コーチの関わりの視点から—

福田 直人 勝田 隆 関岡 康雄

キーワード：Jリーグクラブ，普及，楽しさ，継続

Study on the Promoting Activity in Soccer Clubs Affiliated to J-League — As a View point of a Coach —

Naoto Fukuda Takashi Katsuta Yasuo Sekioka

Abstract

J-league is stating "Improvement of the Japanese Soccer Level and Promotion of Soccer" as their idea for the goal. All the soccer clubs are actually working on their promotion for soccer in each town. Vegalta Sendai, the J-League club where is located in Sendai, Japan is doing their promotion as Soccer Clinice/Schools.

We thought that it was important to let players know the participation/play was fun or makes them continue to play. The purpose of this study was to clarify if there was those two related factors (makes them fun and continuing) for these soccer clinics or school.

We have asked the players to fill out the questionnaire and the data was analyzed through cross total system.

The result showed as follows.

In the Soccer Clinics,

1) The sense of the intimacy to their coach effects positively on how much they would enjoy their activities.

In the Soccer Schools,

1) The results of the game did not effect the enjoyment or the continuation for soccer directly.

2) The improvement (or the awareness) of the skills makes the activity fun and continuing.

3) The trust to the coach makes the activity fun and continuing.

Key words : J-League Club, promoting, fun, continuation

I. はじめに

社団法人日本プロサッカーリーグ（以下「Jリーグ」と略す）は、「日本サッカーの水準向上およびサッカーの普及促進」を理念のひとつとして掲げている（2001）。

財団法人日本サッカー協会（以下「JFA」と略す）は、サッカー協会への登録人数 500 万人の確保および日本代表チームの世界のトップ 10 入りの実現を目指し、普及と強化を柱としたさまざまな施策を作成している（2005）。JFA 技術委員長である田嶋（2003）は、「グラスルーツなくして代表の強化なし」と述べており、グラスルーツ（草の根）の推進、すなわちサッカーの普及と強化が不可分であるという見解を示している。

Jリーグ加盟クラブ（以下「Jクラブ」と略す）は、活動本拠地を「ホームタウン」と定め、ホームタウンを中心とした地域に愛されるクラブづくりを目指している（2001, p8）。Jリーグの参加条件に「チーム組織の保有」がある。そのクラブにおける最高水準の競技力を保持するチーム（以下「トップチーム」と略す）のみならず、第 2 種（高校生年代）であるユースチーム、第 3 種（中学生年代）のジュニアユースチームの保有、第 4 種（小学生年代）のジュニアチームの保有もしくはスクール、クリニック等の活動団体を有することを Jクラブの資格条件として規約で定めている（2005）。

Jリーグが Jクラブに対して、それぞれのホームタウン、地域におけるサッカーの普及、育成、強化を明確に推奨していることが推察できる。その中で Jクラブは、地域密着化を最大のテーマとして、子どもからトップチームの選手まで一貫した指導体制を整備し、トップチームにクラブの「生え抜きのプレーヤー」を供給することを理想としている（1998）。

宮城県仙台市にホームタウンをもつ Jクラブ、ベガルタ仙台も地域に根ざした一貫指導体制の確立を目指している。図 1 はクラブの組織（ファミリー）をあらわしたものである。

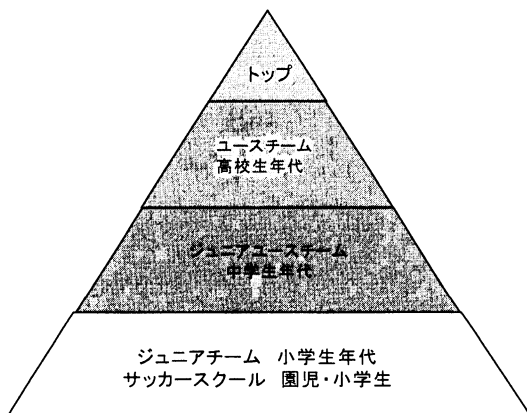


図 1 クラブ組織（ファミリー）図

クラブは、普及事業として「サッカー教室」「サッカースクール」の活動を行っている。表 1 において、これら二つの活動概要を示した。

表 1 普及事業の活動概要

	サッカー教室	サッカースクール
活動形態	希望団体の依頼による巡回指導	会員制のスクール活動
活動頻度	不定期開催の活動(年1, 2回)	定期的活動(週1回)
活動場所	流動的(依頼団体との相談)	宮城県内7ヶ所(校)
対象年代	依頼団体の希望により決定主として小学生	園児・小学生

II. 研究の背景と目的

ヨーロッパサッカー連盟（UEFA）の技術委員長である A. ロクスブルグ（2005）は、「最初は誰もがグラスルーツ（草の根）プレーヤーからスタートするのです。」と述べており、プレーヤーとしての原点の重要性を強調している。どんなに優れた名プレーヤーでも、そのスポーツの入り口を通っている。

勝田（2002）は、「スポーツとの出会いや楽しさ、素晴らしさを与えてくれたコーチがいなかったら、そして、インボルブ(夢中にさせる)してくれたコーチがいなかったら、メダリストは存在しなかったことを忘れてはならない。」と述べており、スポーツの入り口で最初に出会ったコーチ、スポーツそのものの楽しさを伝えることができるコーチの重要性を説いている。

関岡（2004）は、「スポーツは楽しみのために行われ、運動したことにより充足感や満足感を得るものでなくてはならない。」と述べている。スポーツを職業としている者は例外であるかもしれないが、楽しさがスポーツの本質であり、それがスポーツを続けていく原動力になっているように思われる。ましてやスポーツの入り口にいる子どもたちにおいては、尚更のことであろう。

勝田（2004）は、「続けさせる」指導力が、特にジュニア期のコーチにおいて重要であることを述べている。楽しさを伝える、続けさせる指導というものが、スポーツの普及の根幹にあるように思えてならない。

論者は、前述したクラブのコーチングスタッフとして、それらの事業に携わっている。活動においてサッカーの楽しさを提供することが、望ましい普及活動といえよう。しかし、活動におけるコーチの関わりと参加者・プレーヤーが感じる楽しさとの関係性が見出せていないように思われる。

体育学では、高橋ら（1991）が教師行動の構造と児童の授業評価と並行して、学習の楽しさとの関係を明らかにしている。しかし、体育の授業が本クラブの普及事業にあてはまるかは疑問である。

サッカースクールについての研究としては、体力と技術を年齢・経験の度合いから分析した川本ら（1970）の研究、参加動機を中心に研究した萩原ら（1970）の研究がある。また、家庭教育とサッカースクールでの活動との関連を調査し、検討した真栄城ら（1982）の研究があるが、いずれもコーチの関わりと運動やスポーツの楽しさとの関係を多くは述べていない。

楽しさがスポーツの原点であることを念頭に置き、組織の理念や形態、対象によって求められるコーチの関わりを探索していく必要があるように思われる。

本研究では、論者が所属しているクラブの普及事業内におけるこれまでの活動とコーチの関わり、具体的には参加者・プレーヤーにどのように受け入れられたのかを検証した。そして、今後のよりよい普及活動におけるコーチの関わり方について検討し、論者の現場に還元することを目的とした。本研究では、「サッカー教室」および「サッカースクール」において展開されてきた活動について質問紙調査法を用いて検証した。その後、普及事業における「楽しさを提供する」、「続けさせる」コーチの関わりについての知見を得るために考察を行った。

Ⅲ. 研究方法

研究の流れを図2に示した。

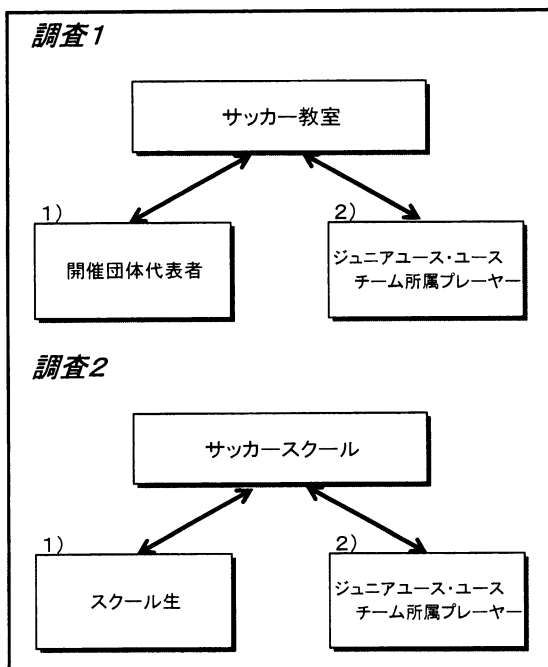


図2 研究の流れ

1. サッカー教室の活動とそこでのコーチの関わりについて

1) 対象団体代表者からみたサッカー教室の活動とそこでのコーチの関わりについて

(1) 概要

サッカー教室における活動が、参加者にどのように受け入れられたのかを検証した。楽しさを提供する、続けさせるコーチの関わり方の知見を得るために質問紙による調査を行った。

調査では、「活動の楽しさ」を「活動の楽しさの度合い」とした。また、サッカー教室内の調査であることから、「続けさせる」を、対象者側からみた尺度として「再度開催希望の度合い」とした。

以上二点、「活動の楽しさの度合い」および「再度開催希望の度合い」と関連のある事項を明らかにすることを目的とした。

(2) 調査方法

①対象

平成15年4月より平成17年11月の間にサッカー教室を複数回開催した団体の代表者12名

②調査期間

平成17年12月上旬より中旬までとした

③調査方法

選択回答形式の質問紙による郵送法

④質問紙について

4, 5段階の尺度項目とカテゴリ形式により形成されている。

質問項目は以下の通りである。

- ・ 開催動機
- ・ 対象者のサッカーのプレー経験（頻度）
- ・ 活動の楽しさの度合い
- ・ 活動で得たもの
- ・ 活動の難易度
- ・ コーチの印象
- ・ 再度開催希望の度合い

2) ジュニアユース・ユースプレーヤーからみたサッカー教室の活動とそこでのコーチの関わりについて

(1) 概要

サッカー教室における活動が、クラブのジュニアユースおよびユースチームに所属するプレーヤーにどのように受け入れられたのかを検証した。楽しさを提供する、続けさせるコーチの関わり方の知見を得るために質問紙による調査を行った。

調査では、「活動の楽しさ」を「楽しさの度合い」とした。対象者は、プロサッカークラブの下部組織チームに所属しているプレーヤーであり、競技志向が強いことが考えられた。よって、調査ではクラブファミリーの観点から、「続けさせる」を、対象者側からみた尺度として「チーム入団希望の度合い」とした。

以上の二点、「楽しさの度合い」および「チーム入団希望の度合い」と関連のある事項を明らかにすることを目的とした。

的とした。

(2) 調査方法

①対象

過去にサッカー教室に参加したジュニアユースおよびユースチーム所属のプレーヤー 31 名

②調査期間

平成 17 年 12 月上旬より中旬までとした

③調査方法

選択回答形式の質問紙による郵送法

④質問紙について

4, 5 段階の尺度項目とカテゴリー形式により形成されている。

質問項目は以下の通りである。

- ・現在の学年
- ・参加時期
- ・参加回数
- ・活動の楽しさの度合い
- ・活動で得たもの
- ・コーチの印象
- ・チーム入団希望の度合い

2. サッカースクールの活動とそこでのコーチの関わりについて

1) スクール生 (プレーヤー) からみたサッカースクールでの活動とコーチの関わりについて

(1) 概要

サッカースクールにおいての活動がスクール生にどのように受け入れられたのかを検証した。楽しさを提供する、続けさせるコーチの関わりを知見を得るために質問紙による調査を行った。

調査では、「活動の楽しさ」を「活動の楽しさの度合い」とした。また、サッカースクール内の調査であることから、「続けさせる」を、対象者側からみた尺度として「(スクール) 活動継続希望の度合い」とした。

以上二点、「活動の楽しさの度合い」および「活動継続希望の度合い」と関連のある事項を明らかにすることを目的とした。

(2) 調査方法

①対象

平成 17 年 11 月時点において、在籍年数 3 年以上の(休会、次月退会者を除いた) スクール生 249 名

②調査期間

平成 17 年 12 月上旬より中旬までとした

③調査方法

選択回答形式の質問紙による郵送法

④質問紙について

4, 5 段階の尺度項目とカテゴリー形式により形成されている。

質問項目は以下の通りである。

- ・現在の学年
- ・入会前のサッカー活動団体所属の有無
- ・楽しさの度合い
- ・活動の楽しさの度合い
- ・活動における楽しい・つまらないとき
- ・上達したと感じるプレー
- ・上達したと感じる理由
- ・おぼえた知識 (ルール, 戦術, 専門用語など)
- ・知識をおしえてくれた人
- ・コーチの存在
- ・活動継続希望の度合い

2) ジュニアユース・ユースプレーヤーからみたサッカースクールの活動とそこでのコーチの関わりについて

(1) 概要

サッカースクールにおいての活動がクラブのジュニアユースおよびユースチームに所属するプレーヤーにどのように受け入れられたのかを検証した。楽しさを提供する、続けさせるコーチの関わりを知見を得るために質問紙による調査を行った。

調査では、「活動の楽しさ」を「楽しさの度合い」とした。対象者は、プロサッカークラブの下部組織チームに所属しているプレーヤーであり、競技志向が強いことが考えられた。よって、調査ではクラブファミリーの観点から、「続けさせる」を、対象者側からの尺度として「チーム入団希望の度合い」とした。

以上の二点、「楽しさの度合い」および「チーム入団希望の度合い」と関連のある事項を明らかにすることを目的とした。

(2) 調査方法

①対象

過去にサッカースクールでの活動経験をもつジュニアユース・ユースチーム所属のプレーヤー 27 名

②調査期間

平成 17 年 12 月上旬より中旬までとした

③調査方法

選択回答形式の質問紙による郵送法

④質問紙について

4, 5 段階の尺度項目とカテゴリー形式により形成されている。

質問項目は以下の通りである。

- ・参加時期
- ・参加回数
- ・活動の楽しさの度合い

- ・活動で得たもの
- ・コーチの印象
- ・チーム入団希望の度合い

IV. 結果と考察

全ての調査において、「活動の楽しさの度合い」および「活動継続（チーム入団）希望の度合い」項目との関連性をみるためにクロス集計を行った。尺度項目の回答はクロス集計を行うため、回収後に二分した。

1. サッカー教室の活動とそこでのコーチの関わりについて

以下に「活動の楽しさの度合い」および「活動継続（チーム入団）希望の度合い」と関連性がみられた事項を挙げる。

1) 開催団体への調査において

有効回収数 11 団体 (91.6%)

- ・「楽しさの度合い」-「コーチに親近感を感じた」
- ・コーチに親近感を感じた団体は活動の楽しさの度合いが高いことが示唆された。

2) ジュニアユース・ユースプレーヤーへの調査において

有効回収数 31 名 (100%)

関連性が見られた項目はなかった。

2. サッカースクールの活動とそこでのコーチの関わりについて

1) スクール生への調査において

有効回収数 169 名 (67.8%)

吉松・岡澤 (2001) は、少年ラグビースクールを対象とした研究から、選手にとっての活動に対する動機付けが「ゲームでの勝利」に起因していると報告している。

表 2 は、本調査の「活動中楽しいときはどのようなときですか。」という質問に対する回答の集計である。

表 2 「活動中に楽しいとき」

項目	楽しいとき				
	できないとができた	ほめられた	ゲームや競争に勝った	話している	その他
回答数	98	65	108	25	4
%	58.0	38.5	63.9	14.8	2.4

上記から、63.9%のスクール生が「ゲームや競争に勝ったときに楽しい」と回答していることがわかった。次頁の表 3 は、「ゲームや競争に勝ったとき」と「楽しさの度合い」。

表 4 は、「ゲームや競争に勝ったとき」と「継続希望の度合い」、とのクロス集計表である。

表 3 「ゲーム・競争に勝ったとき」と「楽しさの度合い」

		ゲーム・競争に勝ったときに楽しい		合計
		いいえ(〇なし)	はい	
楽しさ	まあ楽しい	26	34	60
	以下	15.4%	20.1%	35.5%
	とても楽しい	35	74	109
		20.7%	43.8%	64.5%
合計	回答数	61	108	169
	総和の%	36.1%	63.9%	100.0%

$\chi^2=2.113$ df=1 P > 0.05

表 4 「ゲーム・競争に勝ったとき」と「継続希望度」

		ゲーム・競争に勝ったときに楽しい		合計
		いいえ(〇なし)	はい	
継続希望度	しばらく続けたい	11	28	39
	以下	6.6%	16.9%	23.5%
	卒業するまで続けたい	48	79	127
		28.9%	47.6%	76.5%
合計	回答数	59	107	166
	総和の%	35.5%	64.5%	100.0%

$\chi^2=1.198$ df=1 P > 0.05

上記の表 3, 4 から、「ゲームや競争で勝ったときに楽しい」と「楽しさの度合い」および「継続希望の度合い」には関連性がみられなかった。

以下は、「活動の楽しさの度合い」と関連のみられた項目である。

- ・「運動をしたかったからという入会動機」
- ・「場所が近かったからという入会動機」
- ・なにか運動がしたかったから、場所が近かったからという入会動機をもつスクール生は、楽しさの度合いが低い傾向にあった。

- ・「キックがとても上達したと感じる」
- ・「ドリブルがとても上達したと感じる」
- ・「守備（ディフェンス）がとても上達したと感じる」
- ・キック、ドリブルおよび守備のプレーがとても上達したと感じるスクール生は、楽しさの度合いが高い傾向にあった。

- ・「上達したと感じるプレーの項目数」(表 5)

表 5 「楽しさの度合い」と「上達したと感じるプレーの項目数」

		上達項目数		合計
		0-2	3以上	
楽しさ	まあ楽しい	43	17	60
	以下	25.6%	10.1%	35.7%
	とても楽しい	37	71	108
		22.0%	42.3%	64.3%
合計	回答数	80	88	168
	総和の%	47.6%	52.4%	100.0%

$\chi^2=21.638$ df=1 P < 0.001

上達したと感じるプレーの項目数が多いスクール生は、活動の楽しさの度合いが高い傾向にあった。

- ・「知識は（ルールなど）コーチから教わった」
 - ・「コーチはサッカーを上手にさせてくれる存在」
- 「知識はコーチから教わった」、「コーチはサッカーを上手くさせてくれる」と回答したスクール生は、楽しさの度合いが高い傾向にあった。

以下は、「活動継続希望の度合い」と関連のみられた項目である。

- ・「ドリブルがとても上達したと感じる」
- ドリブルがとても上達したと感じるスクール生は継続希望の度合いが高い傾向にあった
- ・「知識はコーチから教わった」
- 知識はコーチから教わったと感じるスクール生は、継続希望の度合いが高い傾向にあった。
- ・「上達したと感じるプレー項目数」
- 上達したと感じるプレー項目数が多いスクール生は継続希望の度合いが高い傾向にあった。
- ・「活動の楽しさの度合い」（表6）

表6「楽しさの度合い」と「継続希望の度合い」

			継続希望度		合計
			しばらく続けたい 以下	卒業するまで続けたい	
楽しさ	まあ楽しい	回答数	25	32	57
	以下	総和の%	15.1%	19.3%	34.3%
	とても楽しい	回答数	14	95	109
		総和の%	8.4%	57.2%	65.7%
合計	回答数	39	127	166	
	総和の%	23.5%	76.5%	100.0%	

$$\chi^2=20.031 \quad df=1 \quad P < 0.001$$

楽しさの度合いが高いスクール生は、継続希望の度合い度合いが高い傾向にあった。

2) ジュニアユース・ユースプレーヤーへの調査において有効回収数 27 名 (100%)

以下に「活動の楽しさの度合い」および「活動継続（チーム入団）希望の度合い」と関連性がみられた事項を挙げる。

- ・「楽しさの度合い」-「活動継続希の度合い」
- 活動の楽しさの度合いが高いプレーヤーはチーム入団希望の度合いが高い傾向にあった。

V. まとめ

本研究では、論者が所属しているクラブの普及事業内におけるこれまで活動、具体的には参加者・プレーヤーにどのように受け入れられたのかを検証した。そして、今後のよりよい普及活動におけるコーチの関わりについて検討し、論者が関わるコーチ現場にその知見を還元することを目的とした。

研究の対象者は、論者がコーチングスタッフとして所属しているサッカークラブの普及事業として行われている「サッカー教室」および「サッカースクール」の参加者、スクール生、現在クラブのジュニアユース・ユースチームに所属し過去に参加および入会の経験があるプレーヤーであった。研究方法は、対象者への質問紙調査法を用いた。

調査の結果から得られた知見は、次の通りであった。

<サッカー教室において>

・コーチの親近感（親しみやすさ）が、活動の楽しさに好影響を及ぼす。

<サッカースクールにおいて>

- ・ゲームや競争の勝利は、活動そのものの楽しさや、活動（サッカー）の継続に対して直接的に反映されるとはいえない。
- ・技術の向上（の自覚）は活動を楽しくさせ、活動（サッカー）を続けさせる。
- ・サッカーそのものが入会動機でないスクール生は、活動についての楽しさの度合いが低い。
- ・コーチへの信頼感は活動を楽しくさせ、活動（サッカー）を続けさせる。
- ・活動の楽しさは、活動（サッカー）を続けさせる。

引用・参考文献

- G. ウリエ, J. クルボアジェ:小野剛, 今井純子 (2000), フランスサッカーのプロフェッショナル・コーチング (再版). 大修館書店: 東京, p32.
- 萩原武久・山本功一・五島裕治郎 (1970) サッカースクールの実態について第1報 - 参加の動機を中心に - . 体育学研究, 14 (5) : p36.
- J. W. ムーア (1970) スポーツコーチの心理学 (8 版). 大修館書店: 東京, pp5 - 9.
- 勝田隆 (2002) 知的コーチングのすすめ. 大修館書店: 東京, p35.
- 勝田隆 (2004) ジュニア期における指導のコツ. 体育科教育 2004 年 11 月号 : pp18-21.

川本武之, 武智英裕 (1970) サッカースクールの実態
- 主として児童の体力と技術について - . 体育学研究,
14 (5) : p220.

関岡康雄編著 (2004) コーチと教師のためのスポーツ
論. 道和書院 : 東京, p3.

社団法人 日本プロサッカーリーグ (2005)
2005 Jリーグメディアガイド. p6.

社団法人 日本プロサッカーリーグ (2002)
21世紀のスポーツに向けて.

社団法人 日本プロサッカーリーグ広報部 (1998) 地
域に根ざしたスポーツクラブと選手の育成. 青少年問
題, 45 (12) : pp34-39

高橋健夫, 岡沢祥訓, 中井隆司, 芳本真 (1991)
体育授業における教師行動に関する研究 - 教師行動の
構造と児童の授業評価との関係 - . 体育学研究, 36 :
pp193-208.

山田一弘 (1991) 課外活動におけるサッカーの指導過
程に関する一考察 - 小学校・中学校を通じた一貫指導
の試案の作成について - 日本体育学会第 42 回大会号 :
p780.

吉松浩, 岡沢祥訓 (2001) 少年ラグビースクールに関
する研究 - コーチ・選手の意識調査 - . スポーツ教育
学研究, 第 21 回大会号 : p35.

財団法人 日本サッカー協会技術委員会 (2005)
テクニカル・ニュース, 6 : p5.

財団法人 日本サッカー協会 技術委員会 (2003)
第 3 回フットボールカンファレンス報告書.

財団法人 日本サッカー協会 : 東京, pp179-180

財団法人 日本サッカー協会 技術委員会 (2005)
第 4 回フットボールカンファレンス報告書.

財団法人 日本サッカー協会 : 東京 pp160-178